

会報

No. 87

平成24(2012)年9月15日
web:<http://www.library.pref.kyoto.jp/renkyo/renkyo.html>

京都府図書館等連絡協議会
事務局
京都市左京区岡崎成勝寺町9
京都府立図書館内
TEL (075) 762-4655

<目次>

1 面

- ・会報が変わります
- ・Web 版掲載内容のお知らせ

2 面

- ・定期総会報告

3 面

- ・YA サービスアンケート結果について
- ・YA 出版会との合同研修会報告

4 面

- ・京都府図書館等連絡協議会役員体制及び事業計画
- ・府内公共図書館取組事例紹介

会報が変わります！

デジタルと紙の二本立てへ

今年度の会報から、年二回四頁立てで発行することに伴い、Webと紙面の二本立て構成へ移行いたします。

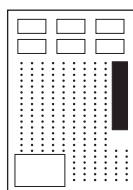
今までは紙幅の関係で掲載できる内容が限られていましたが、今回のリニューアルによって、より多くの情報を皆様にお届けできるようになります。例えば、従来のものは大会や総会の報告に多くの紙面を割いておりましたが、今号より紙面では概略に留め、詳細についてはwebで見いただく形式になります。代わりに多くのコンテンツや事業概要等を紙面に掲載し、掲載項目の増加を図ります。

なお、webでご覧いただける内容については当会報に目次を掲載いたします。

また、内容につきましても、より一層業務にいかしていただけるものを目指して毎号、図書館に関するタイムリーな話題や考えていきたいことなどを選んで特集していきます。今後とも、新しくなった会報をよろしく願います。

<従来>

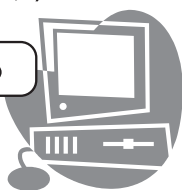
紙面のみ



- ・図書館長からのご挨拶
- ・総会の報告レポート
- ・講演会の内容詳細
- ・各図書館の取り組み
- ・役員・委員の紹介
- ・委員会報告
- ・・・etc

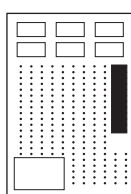
<今月より>

Web



- ・文字量の多いもの
- ・講演会、講演内容詳細等、より詳細な記事

紙面



- ・総会や講演会の概要
- ・委員等の紹介
- ・旬な特集
- ・web 掲載内容目次

○web 版掲載内容

- ・定期総会配付資料（平成二十三年度会務報告、事業報告、平成二十四年度事業計画、京都府図書館総合目録ネットワーク参加状況、定期総会講演会配付資料及び報告）
- ・YA サービスアンケート調査結果一覧
- ・平成二十四年六月二十八日開催 YA 出版会合同研修会
- ・鈴木出版永吉敦郎氏ミニ講演会「YA 本制作の舞台裏」、大西敏之南丹市立中央図書館長実践報告「YA の読書推進中学生へのアプローチ」
- ・平成二十四年七月四日開催国際フォーラム
- ・ジャネット・アッハベルガーハインブルク青少年図書館 H o e b 4 U 館長講演「ハンブルク青少年図書館のコンセプト及びマンガを使った取り組みについて」、小川剛京都精華大学国際マンガ研究センター研究員「京都国際マンガミュージアムにおける、中学校向けマンガワークショップの実践報告」、大西敏之南丹市立中央図書館館長「YA の読書推進 中学生へのアプローチ」

平成二十四年度 京都府図書館等連絡協議会総会開催

平成二十四年度京図連協定期総会が、平成二十四年四月二十五日(水)午後一時三十分から、京都府立図書館において開催されました。

開会行事で、大西会長から、日本図書館協会の助成金が来年度からなくなる見込みのため、収入の減が活動内容の低下とならぬよう、皆様からのお知恵を拝借して検討していきたいとの挨拶の後、国立国会図書館関西館、京都府教育庁指導部社会教育課から来賓の祝辞、京都府立図書館から会場地として歓迎の挨拶をいただきました。

その後、平成二十三・二十四年度の理事が紹介され、北岡宇治市中央図書館長を議長に選出し、加盟館四十九館中、出席二十四館、委任状二十二館により総会が成立していることを確認し、議事が開始されました。

◆議事内容

事務局から平成二十三年度会務報告及び平成二十三年度決算報告、監事の小川京都市南図書館長から監査報告がなされ、会務報告・決算報告ともに承認されました。

続いて、監事に松野京都市北図書館長、橋本長岡京市立図書館長、顧

問に中西京都市中央図書館長、伊藤京都府立総合資料館長、宮野京都府立図書館長とすることが承認されました。

また、事務局から平成二十四年度事業計画案及び予算案の説明を行い、ともに承認されました。

質疑応答で、表彰規程の見直しについて検討するよう要望があり、今後理事会で検討していくことになりました。

◆功労者(団体)表彰

総会後、府内の図書館等で読み聞かせ等図書館活動や読書活動の振興に寄与された団体・個人を表彰し、永年の活動を称えました。

◆功労者(団体)一覧

図書館友の会けやき

代表 永井 麻里様

京都府立図書館音訳協力者

倉本 直治様

わくわく親子劇場

代表 石川 しのぶ様

京丹後市立峰山図書館読み聞かせボランティア「わ」

代表 鈴木 祥子様

松尾 一代様(京都市中央図書館)

清永 博子様(京都市右京中央図書館)

西原 千明様(京都市醍醐中央図書館)
山口 照江様(京都市東山図書館)
大門 加寿美様
(京都市久世ふれあいセンター図書館)

奥 三津子様(城陽市立図書館)

◆定期総会講演会

「災害と図書館く大災害に備える 図書館相互応援の提案」と題して新潟県立図書館前館長安藤哲也氏に講演をいただきました。

前半は、図書館と災害のことについて、図書館は災害に弱いことを再認識し、開館時間中に大災害が起こった時の対策について改めて見直すことや、東日本大震災のように、府県立図書館が被災して機能を失った場合に備え、府県を越えた広域での図書館相互の応援の申合わせをしておくことが重要であるとお話をいただきました。

後半は、新潟県立図書館が、従来の静かに本を読む「図書館」から多様な個性的な「図書館文化館・図書館情報館」へ脱皮を図るため、さまざまな取組をされていることの紹介がありました。

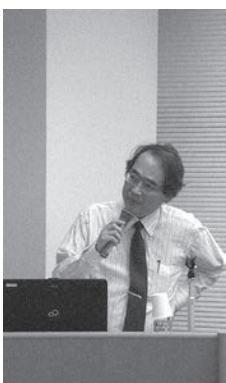
・日本十進分類順に並んだ専門書群、辞書辞典、禁帯出の郷土資料ばかりだった書架に、日常生活密着型機能を大幅に取り入れた「こども図書室」、「くらしガーデン」といったテーマ別のコーナーを作る。

・電子図書館の基盤づくりに力を入れて、図書館の利用登録を郵送でできるようにする。また、インターネット利用の音楽配信サービスを実施

・期間限定で、利用者が自由に書庫に出入りできる「公開書庫」や、図書館内にテナント方式のライブラリーカフェを設置

・地元ゆかりの若手芸術家に、県立図書館オリジナル作品の制作を依頼したり、図書館利用カードのデザインに採用

最後に、大規模災害に備える図書館相互応援の仕組みづくりは、ネットワーク社会における図書館の新たなあり方を問う直す際の一つの試金石とされていること、図書館の内部事情は少しずつ異なるが、それぞれの立場に固執せずに、連携しよう、協力しようという気持ちになって、みんなの役に立つ仕組みを作っていくことが求められていると締めくくられました。
(詳細内容については、ホームページに掲載)



YA出版会・京都府図書館等連絡協議会

合同研修会に参加して

本研修会は、出版界の方々と交流する貴重な機会となりました。

鈴木出版の永吉氏からは、自ら手がけられた『ヒットラーのむすめ』（ジャッキー・フレンチ作）出版の経緯を聞きました。こうした、主人公が社会のありように対して自ら考え、進むべき道を探っていく姿を描いた作品を、YA世代にぜひ届けたいのだという強い思いが伝わってくる講演でした。

南丹市立中央図書館大西館長からの実践報告では、中学2年生への読書指導のようが映像で紹介され、「本が好きじゃない人は、まだ好きな本に出会っていないだけ」「途中で読むのをやめてもいい。でも、次の本に手をのばそう」といった語りかけが印象に残っています。

永吉氏は、前掲書出版後に各方面から反響が寄せられて、とても励まされたとおっしゃっていました。私たちが日々本をきちんと読み、出版界に対して感想や要望をあげていくことも、YA世代に対するサービスの充実につながるのではないかと感じました。これからです。

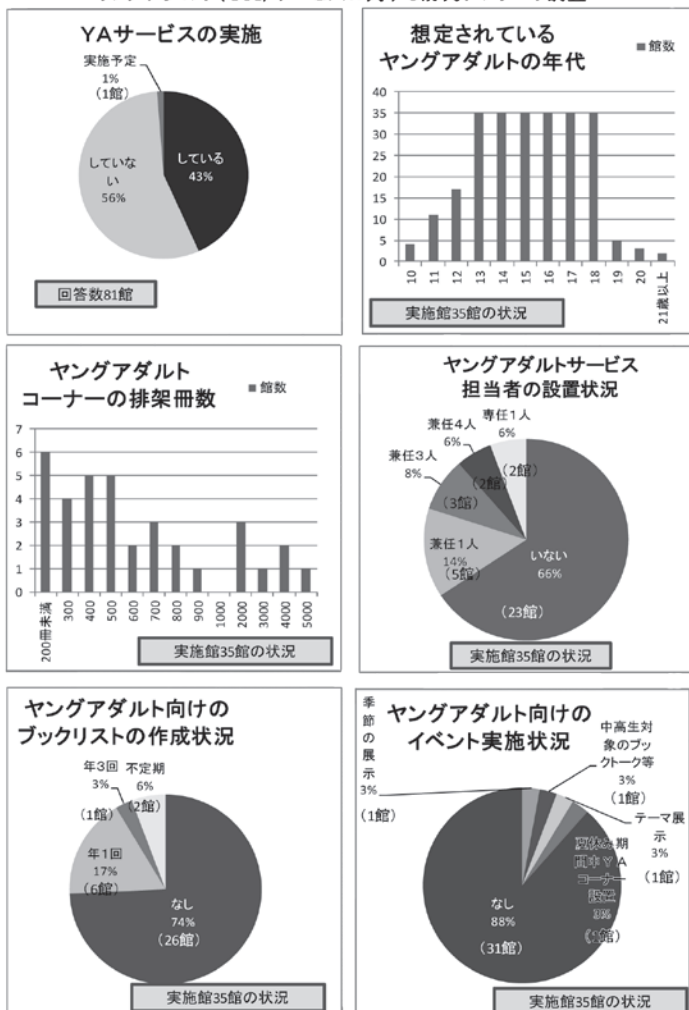
（舞鶴市立西図書館 西舩朋子）

中学生・高校生の図書館利用の伸び悩みに関して、「余裕」の態度が取れる図書館は少ないだろうと確信し、そんな悩みにあわよくば特効薬を、この思いでの研修会への参加でしたが、冒頭、出版社の方から「そんな方法はありません」としつかり釘をさされ、研修は始まりました。

現実の悲惨な戦争を描きつつ、ミステリのように謎が解けてゆく「面白さ」を併せ持つ衝撃の児童文学『ヒットラーのむすめ』。この本を出版された鈴木出版の永吉さんの、「どうして生きてゆくのか、という重みを持つ叢書の創出」のお話は、子どもに確実にウケるライトノベルを紹介しがちな日々には警鐘を鳴らしてくれました。子どもたちにはもともと、現実の生き方にも触れてもらわねば。

南丹市立中央図書館・大西館長による中学生への読書指導の様子は、適切な言葉ではないかもしれませんが、大変感動的でした。こどもたちが素直に絵本に笑い転げる姿を見て、

ヤングアダルト(YA)サービスに関する府内アンケート調査



(H24.5 京図連協調査)

涙が溢れてしまったのは何故なのでしょう？たぶん、自分自身を縛っていた「今の子どもたちは本が嫌いなんだ」という固定観念が取り払われたせいだと思います。実際に使えるようなテクニックも満載で、今すぐ中学校に行ってブックトークをしたくなります。

その他にも、「読書は唯一、〃ながら〃ができない能動的な、頭を使う作業」、「中学生はいっぱい笑って心の免疫力をあげる」、「人間は言葉でしかものを考えられない。読書によって言葉と考え方の幅が広がる」、「本を嫌いという子は、好きな作家

とめぐり合っていないだけ」などなど、大切な言葉をたくさん戴きました。そのことがとても心強く感じました。YA世代の子どもたちと、運命の本をめぐり合います。それはもしかしたら私たち図書館員の肩にも掛かっている。大切な仕事を為し得る、翻っていえばとても責任重大な立場にいることを再認識し、日常の緊張感を新たにしています。

（京都市東山図書館 神田千砂）

平成二十四年度京図連協役員体制

会長

大西敏之（南丹市立中央図書館）

副会長

塩見裕（与謝野町立図書館）

理事

大槻政美（研修研究委員会委員長（京田辺市立中央図書館）、西村隆相互協力委員会委員長（京都府立図書館）、仲田義明（広報委員会委員長（京都市岩倉図書館）、佛円清太郎（京都市伏見中央図書館）、島中聡（向日市立図書館）、岸均（久御山町立図書館）、原田茂弘（木津川市立中央図書館）、塩見英世（福知山市立図書館中央館）、久保誠一（宮津市立図書館）

平成二十四年度専門委員会委員一覧

○研修研究委員会

菅沼夏子（長岡京市立図書館）、出口宏子（八幡市立八幡市民図書館）、奥山一紀（宇治田原町立図書館）、中川環（木津川市立中央図書館）、藤田志帆（精華町立図書館）、鶴飼弘子（亀岡市立図書館中央館）、四方希友（福知山市立図書館中央館）、竹之内英子（舞鶴市立西図書館）、岡本知子（宮津市立図書館）、田中せつ子（京都市伏見中央図書館）、林下ちあき（京都ライトハウス情報ステーション）、若林正博（京都府立総合資料館）、山下秀樹（京都府立図書館）

○相互協力委員会

岡本三容子（向日市立図書館）、岡井一代（城陽市立図書館）、新築猛（久御山町立図書館）、鈴木浩史（井出町図書館）、前原英子（南丹市立中央図書館）、後藤裕美（綾部市図書館）、瀬戸真由美（与謝野町立図書館）、亀田真奈美（京丹後市立峰山図書館）、田畑倫子（京都市中央図書館）、楠久美（京都府立総合資料館）、堀奈津子（京都府立図書館）

○広報委員会

村重あゆみ（宇治市中央図書館）、釘本容子（京田辺市立中央図書館北部分室）、河田美奈子（舞鶴市立東図書館）、竹村佳子（京都市東山図書館）、藤原直幸（京都府立総合資料館）、濱口祐巳子（京都府立図書館）

京都府教育委員会との共催事業

◎第一回子ども読書本のしおりコンテスト表彰式

平成二十四年十月二十八日（日）
ホテル京都ガーデンパレス
十三時から

◎第一回子ども読書本のしおりコンテスト巡回展

十月三十日（火）～十一月八日（木）
京都府立図書館を皮切りに府内図書館等を巡回

平成二十四年度研修計画

◎北部会場

平成二十四年十二月六日（木）

場所 みやづ歴史の館

講師 滋賀県長浜市立高月図書館長 明定 義人氏

内容未定

◎中部会場

平成二十四年十二月七日（金）

午後二時から四時まで

場所 京都府立図書館

講師 子どもの本専門店メリーゴーランド京都店 店長

内容 「子どもと本をつなぐ」

◎南部会場

平成二十四年十二月

場所 京田辺中央図書館

内容 「これからの公共図書館の存在意義を考える第一回目」

次世代に向けたサービス」

府内公共図書館取組事例紹介

「英語図書、見せ方を工夫して利用増大。」

岩倉図書館 仲田義明

岩倉図書館では三年前から「英語の多読」という観点から蔵書構成を見直し、テーマに沿った排架を行ったところ一定の成果をあげることができました。今回このことについてご報告いたします。

本館は延床面積五百六十四㎡、蔵書五万八千冊。十九館ある京都市図書館の分館として機能しております。

そもそのきつかけは四百冊余りの英語図書の寄贈を受けたことでした。その後少しずつ買い足したものの

も含めて、現在の英語図書所蔵数は約千百冊。

多読とは近年わが国でも少しずつ知られるようになってきた語学習得のためのメソッドで、要するに楽しくたくさんさんの英語図書を読めば自然と力が付いてくるというものです。

そこで本館ではこの目的に沿うように書棚を整理して六段程度のスペースを確保し、英語図書を難易度0～8に分類して排架すること、利用者がご自分のレベルに合わせて簡単に選べるようにしました。図書選定にも工夫をこらしています。

今回あらためて五月から六月までの貸出データを取ったところ、英語図書千百冊の一ヶ月当たり平均貸出数が九百四十九・五回となりました。これには他館への貸出や府内図書館への貸出も含まれております。

それまでほとんど借りられることのなかった英語図書でしたが、私どもなりに利用者の視点に立って工夫を施したところ、このように利用を増やす事が出来たわけです。

もちろん公共図書館にとって英語図書は提供すべき多くの情報のひとつでしかなく、また貸出数も全体からすればほんの一部にすぎません。

しかし全国的に改革を求められていいる現在の図書館にあつて、例えば法律や医療情報などにも同様の視点をもって利用拡大を図ることができないか、今後ともその可能性を検討していきたいと考えております。